

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

決起

二月の初旬、水野は市内の県立病院へ妻をつれていった。

最初、ふたりならんで問診を受けた。生年月日、曜日、城山からみた自宅と病院の方位などの問いに久美子は無難に応えることができた。つぎに家事のことを訊かれた。いまはほとんど水野がやっている。久美子はもじもじしていたが、ふと思いついたように顔をあげ、洗濯物をたたんでいるといった。すると医師は目じりをさげ、それは立派なことですねと患者をほめた。久美子はいかにもうれしそうだった。

問診のあと、久美子はいわれるままに着替えてMRIを撮った。東京のときのように逃げ出すことはなく、終始おとなしかった。

ひととおりの検査が終わると、カウンセリングがあるというので、久美子が別の部屋へよばれていった。そのすぐ後、脳神経外科の診察室のドアがあき、

「こちらへ、お入り下さい」

と看護師が丸い顔だけのぞかせて水野にいった。

入ると、脳のMRI画像を診ていた医師が水野のほうへ向きなおし、丸椅子をすすめた。医師は透明ファイルからA4の用紙をとりだし、活字に目を落としながら、「よく観察されていますね」と感心した。水野はここ一年余りの妻のおかしな言動を用紙三枚にまとめ、医師へ事前に提出していた。ひと月前に上京したものの、本人が逃げ出したためMRIが撮れなかったことも記してある。

「記憶をつかさどる海馬かいばに欠損はありません。しかし側頭葉前方部から脳周りにかけてあきらかに萎縮しています。自己中心の言動が多くなるのは仕方ありません」

とMRI画像の分析と問診、それに観察記録から医師は診断した。

水野はおそろおそろ訊ねた。

「やはり、病気でしょいか」

「ピック病の中期にはいったころ、だと推認します」

医師は画像をたしかめながら慎重にこたえた。

水野は表情をこわばらせた。

「これから、どうなりますか」

「ピック病は進行性の病気ですが、人や環境によって…」

と医師はいよいよんだ。水野が移植者であることはよく承知している。

「私の健康のほうは、まったく問題ありません」

「それは何よりです。しかし記者の仕事のほかに、いま移植医療の運動で忙しくされておられるようですから、対策を考えないとこれからが大変です」

「在宅介護は無理でしょうか？」

「いま、おもにお世話をされている方が心配です」

いわれるまでもなく、実家の母に負担をかけるのはもう限界である。

水野は腕をくんだ。求める会の活動を休むべきなのか、迷った。妻の介護のために、市長を辞した例さえもある。ましてや、痛い思いをして、自分の腎臓をさしだした妻ではなかったか。自問していると医師が助け舟をだした。

「患者ご本人のプライドを傷つけないよう配慮して、まず介護保険を申請されてみたらどうでしょう」

「介護保険ですか」

「そうです。そろそろデイケアを考えないといけませんよ」

「この先、進行が早まりますか」

「早目に対応されたほうが、御本人には楽です。通所も在宅もありますが、ケアマネージャーとよくご相談なさってください」

帰宅すると、玄関でよい匂いがした。柵に活けられた水仙に冬日がとどいている。朝はなかったから、娘夫婦が病院へでかけている間に、義母が活けてくれたようだった。気持ちがあうれしく、久美子が居間のこたつに入っているのをたしかめると、さつそく義母に電話をして礼をいった。診察の結果を報告しながら、保険の手続きがすめば、ケアマネージャーとも相談し、週に何日かは通所介護にするつもりだと話すと、義母はとくに反対はしなかった。求める会は正会員が八百名をこえ、日ごとに社会的な存在感を高まっている。移植者の仲間だけでなく、腎不全に苦しむ患者たちが寄せる期待も高まってきている。修復腎移植が国から認められるまで、水野はこの運動をやめるわけにはいかない。

湯を沸かし、ゆっくり時間をかけてコーヒーを二人分淹れた。

襖をひいて、居間をのぞくと、久美子がいない。寝室へいつてみたが空である。縁側から庭においてみても人影はなかった。不安な気分からられて台所へひき

かえすと、玄関のほうで人の気配がした。小走りに玄関へゆくと久美子が三和土たたくにうづくまっていた。

「なにしている？」

返事はなかった。

三和土において傍らにしゃがんだ。久美子の足元には房咲き水仙の花弁が散らかっている。久美子は白い顔をあげ、

「正ちゃん、ほらきれいでしょ。お花晶をつくっているの」

とあどけなく笑った。

それから二日後の夜、水野はふたりの人物と会った。

惠州会本部の野添事務総長と、岡山市内で弁護士事務所をひらいている森秀信である。森は水野と同じような病歴をもっている。透析困難症のため妻から生

体腎移植をうけたがうまくゆかず、透析にもどっていたところ、丸山誠医師の実弟の健介医師から病腎を移植する方法もある、と教えられた。「病腎でもええから、透析からのがりたい」と伝えていたところ、尿管がんの腎臓がたので、納得して移植をうけた。このときの手術には実兄の丸山誠医師が立ち会っていた。それから八年、体調はすこぶる良好で、移植者のスポーツ大会にも毎年参加している。そして臓器売買事件がおこると、森はいち早く丸山医師を支援するブログを立ち上げた。さらに病腎問題では求める会に呼応し、岡山にも支部をつくり、広島にできた支部との連携をふかめていた。そんなことから水野とは電話で何度も話を交わしている。ふたりは会うのは初めてだったが、すでに旧知の間柄になっていた。

あいさつもそこそこに、ホテルの小会議室で三人は向かいあった。

さっそく野添は、腎不全対策のシンポジウムを開くよう提案した。これから決起集会の準備に入ろうというときである。シンポジウムなどまだ想定もしていなかったが、もしやるとすれば夏ころがよい、と水野は応えた。ところが野添は、「四月の中旬に、求める会主催ということで、よろしいですか」

と間をおかずにたたみかけてくる。すぐ横では森がうなずいている。

藪から棒の話だが、規模と内容次第ではできないことはない、と水野は思った。瀬戸内海グループの医師や患者たちが、シンポジウムで結集するのは望ましい。その規模だったら四月でもできる、と水野は考えた。場所は宇和島、松山、あるいは森が野添とつれだつて提案に来ているから、岡山や広島も候補地になる。そんなことを思案しながら、水野は前向きに応じることにした。

「十一日の日曜日に、決起集会にむけた役員会があります。その席で、ご提案のシンポジウムの件は役員会にはかかってみます。いま原案をお持ちですか」

「はい、項目だけです。企画書を一枚、用意しております」
野添は表情をやわらげた。

「こうしてお会いする前に電話でもお話ししておくべきでしたが、講師の先生方からの出席の返事が昨日、やっとそろいました。それで急遽、森弁護士にもご同行をお願いして松山に参ったしだいです」

という、野添は背後にひかえた秘書に資料を配るように命じた。

水野は茶封筒をあけ、用紙を一枚とりだした。

国際腎不全シンポジウム

招聘講師 リチャード・ハワード（元米国移植外科学会会長）

ティモシー・プルート（米国臓器配分ネットワーク会長）

エマヌエラ・タイオーリ（米国ピッツバーク大学癌研究所所長）

藤原志郎（米国フロリダ大学医学部移植外科助教授）

パネラー

森秀信（弁護士）、高見澤敬三（病理学者）、

リチャード・ハワード、ティモシー・プルート、藤原志郎

司会進行

「移植医療への理解を求める会」から二名

期日

四月十七日（火）と十八日（水）

会場

大阪シェラトンホテル（十七日）ホテルニューオータニ（十八日）

参加者

それぞれ千名

「これは！」

水野は絶句した。野添はためすように水野をみつめている。

「こんなこと、可能ですか？」

アメリカの移植学会の最高権威を招こうというのである。

「やらねばなりません。それも早急にです」

野添は強い口調で断言した。そして日本の移植学会は理事長が交代する今年度末までに、他の学会にも働きかけて修復腎移植を否定する声明を出すことになるだろうから、その学会声明への反論として、腎不全治療の世界的な権威を招き、いま修復腎移植が世界でどのように受けとめられているか、実情を語ってもらわなければならない、といった。

想定をはるかにこえるシンポジウムにとまどい、水野が返事をしかねていると、森が歯切れの良い標準語で、弁護士らしくやや饒舌に補足した。

「ご承知のとおり移植後進国の日本の学会は、なにしろ外国の権威には弱い。内弁慶だから国内でいくら正論をいっても、学会の上層部は自分たちが決めた形式や手続きばかりを問題にして、聞く耳をもとうとしません。ところがですね、同じことを欧米の学者がいうと、つつしんで拝聴することになる。横文字にするとなちまち権威になるってわけですよ。たとえば占領政策がはじまると、たった昨日まで鬼畜米英を叫んでいた連中が、マッカーサーを神や仏のように奉り、日本をアメリカの属領にしてくださいと、といわんばかりにすり寄った。まあこの変わり身の早さは、明治の御一新以来ずっと日本人のなかにある欧米コンプレックスに由来していますね。横文字が好きで学会上層部の連中ほどこれが強い。われわれはこの精神文化を逆手にとろうというわけです。日本が降伏文書を調印したミズリー号の艦上になぞらえて、こんどの国際シンポジウムをミズリー号作戦と名付けています。まずミズリー号を大阪と東京に寄港させ、医療界に文明開化をもたらそうというわけです」

「なるほど、ミズリー号作戦ですか」

森の論理に飛躍も感じたが、日本も日本人も「外圧」に弱いことはたしかである。ここは野添の提案をありがたく受け入れ、シンポジウムの実現にむけて求める会の力を結集するのが一番だった。講師の招聘と日本滞在にかかわる経費、同

時通訳の手配、会場の確保、参加者の動員などはすべて惠州会のほうでやるので、求める会はシンポジウム自体の司会と進行だけお願いしたい、と野添はだめ押しをした。

「すると期日はもう確定でしょうか」

「会場はすでに押さえております」

「しかし、一千名もの参加者となると、大変です」

「皮肉なことですが水野さん、マスコミのおかげで患者さんや医療関係者だけでなく一般市民にも関心が高いので、会場はかならず満席になります」

「一千名ですよ」

「ええ、大阪ドームや東京ドームならともかく、会場はたかがホテルですから。むしろ狭すぎはしないかと気をもむくらいです。それよりも水野さん、こんどの決起集会のほうは大丈夫でしょうか」

と野添はテーマを変えた。

中央からみれば、宇和島は四国の、それも西南のはしっこにある小都市である。野添は宇和島にどれだけの人が集まるか、そのことを心配した。

「はい、宇和島の文化会館は六百名で満席ですが、せめて半分くらいは席を埋めよう、ということに向井原さんが漁協や真珠組合へ動員をかけています」

向井原は八幡浜、三崎、宇和島、御荘、それに高知県の宿毛の漁協と真珠組合へ足を運び、決起集会への参加をよびかけていた。これらの地域は昭和三十年代、真珠の母貝養殖産業でうるおった歴史をもっており、養殖に貢献した向井原の祖父の助一のこと語りつがれているので、協力は期待できた。といっても、漁村の繁栄はもう遠い昔のことと、どこもやたら猫だけが目につく寒村になっているから、人集めとなるとやはり大変である。

野添は参加者数をたしかめた。

「去年の十一月、宇和島での設立総会が百二十名でしたね、そして先月の松山での講演会が百五十名。決起集会とはいえ宇和島で三百名、うーん、これはなかなか大変ですね」

とても無理だろう、という表情である。森がいった。

「野添さん、岡山からも何十名かは参加します。また広島からもまとまった人数がだせるよう私のほうで瀬戸内海グループの先生方の患者関係者へよびかけてみますよ。せめて席の半分はうまらないと。意地の悪いメディアは空席が目立つように報道しますからね」

森につられて、水野は言い訳のようにいった。

「求める会にしても、向井原さんだけに頼るわけにはいきませんから、移植者の会のみなさんにも家族づれで参加をよびかけ、まあ松山からも百名くらいは動員したいと思っています」

と、口にしたが、百名はちよっとしんどい数である。

「なるほど、それだと三百はなんとか確保できそうですね。この種の会に宇和島で三百名も集まれば、それはそれで大きなニュースですよ。盛会を期待しております。役員のみなさんにもぜひ、シンポジウムの件とあわせて、よろしく願います」

と野添は頭をさげた。

その役員会では、設立総会と講演会を成功させた経験が役立ち、決起集会の運営について異論がでることはなかった。会場が大きくなるので、受付と駐車場係りの人数は増やした。舞台上につるす横看板、会場入り口の立て看板、それと案内板などは、宇和島の看板屋の役員がすべてやってくれることになった。意見をかわしたのはやはり参加者の確保と、シンポジウム主催の件である。

「半分は埋まらんかもしれんなあ」

と向井原は弱気になっていた。漁村そのものにかつてのような元気がない。

「この際、野添さんに支援をお願いして、恵州会から少し動員してもらったらええ」

と村役場に勤めている役員が提案すると、向井原が不快な顔をした。

「それはいけません。恵州会とわれわれは目標が同じやから、一緒に運動しとるが、あくまでも対等でなきゃいけん。人脈も資金力も比較にもならんが、頼ったらいけません。シンポジウムにしても、やるのなら恵州会は裏方に徹してもらわなきゃいけん。会の運営は一から十まで、われわれできっちりやる。われわれが恵州会をつかう。われわれは恵州会という天馬に騎乗するジョッキーや。みんなその気持ちでやろうやないか」

と向井原は役員によびかけた。天馬とジョッキーというよりも、実情はゾウとその背中の上のアリといった関係にちがいがなかったが、向井原がいう天馬には説得力があった。まさに天馬空を行く、でありたい。しかし求める会としては天馬に頼らず、ここは自力で参加者を三百名確保することを目標とした。

向井原代表のあいさつのあと、「修復腎移植は第三の道」のテーマで高見澤敬三が講演し、それから水野が厚労省への要望書に六万一千名の署名が集まったことを報告する。そして丸山医師を激励し、武道家の役員の音頭で参加者全員がシュプレヒコールあげる。

決起集会の中味はこのように決まった。また丸山医師の参加は集会の成否にかかわることなので、水野が責任をもってひきうけることになった。

最後にシンポジウムのことについて話し合い、「天馬に騎乗する心構えでやろう」ということで全員が気持ちをひとつにした。恵州会とは対等でなければ、広く国民からの理解や協力を求めることはできない、というのが全員の共通した認識だった。求める会は天馬に乗るのであって、乗せられているのではない。そ

このところを純心な高校生のように、役員の一入ひとりたがたしかめあったのである。その上で求める会からは、代表あいさつの向井原、パネルディスカッションの司会役の水野、シンポジウム全体の総合同司会役の有吉、それにディレクターの大学教授の三谷と元コーディネーターの原三津夫の全部で五名が、大阪と東京の国際腎不全シンポジウムに手弁当で参加することになった。

水野は夜、内藤に電話で役員会のことを報告した。

「天馬に騎乗ですか、いいですね」

と内藤は向井原のレトリックと心意気をほめた。運動の主体はあくまでも求める会である。独立自尊こそ運動の精神ですよ、と内藤は念を押しした。

「参加人数を確保するため、惠州会にも協力をお願いしようという話ができましたが、それはしないということになりました」

「ふん、なるほど。それで何人ぐらいを見込んでいますか」

「三百人です」

「三百人？」

内藤が声をたかめ、反復した。

「それで会場の半分は埋まります」

と水野がいうと、内藤はしばし沈黙し、それから言い聞かせるように話した。「いいですか水野さん、永い闘病生活で、とかく患者は自分への評価を過小にしがちです。その心理はわからないでもないが、この闘いをきっかけにみんなは自信をとりもどすべきです。街頭署名は中四国で六万人をこえたのだから、みんな自信をもって天馬の手綱をしっかりひかないといけませんよ。求める会の運動はいま、日本の医療の実情を憂う国民みんなが注目しています。決起集会については幸い新聞各紙が予告記事を書いています。わざわざ参加者をかき集めなくても、全国からたくさんの方が宇和島にやってきます。会場はいっぱいになります」

「そうですね」

「そうですね。文化会館から人があふれでるにちがいません」

「夢のようですね」

「いいですか水野さん、運動はいまや全国的なひろがりをもっている。野添総長が大阪や東京のシンポジウムで千名は優に集まるといえるのは、その通りです。宇和島だって地理的にはへき地だが、参加者はきつと千名をこえますよ」

「そんなに集まるとは、とても思えません」

「自信をお持ちなさい。文化会館は参加者であふれます」

と内藤は力強いいきった。

決起集会前日の土曜日のことである。

日本移植学会のよびかけで、移植、泌尿器科、透析、病理、腎臓の五学会と、

学会から各病院へ派遣されていた調査委員が一堂に会した合同会議が大阪市内のホテルで開かれた。秘密会ということだったが終了後、ある学会幹部が別室に記者たちをあつめ、合同会議のなかで、

「B型肝炎ウイルスに感染していたドナーのネフローゼの腎臓と、梅毒の抗体検査で陽性反応を示していた男性からの腎臓を丸山医師が移植につかっていた」

という耳を疑うような報告が、市立病院担当の調査委員からあったことをもらした。

わきたつ記者たちの質問に答え、市立病院では病腎の摘出そのものに疑問があるケースが多々あり、会議では病腎移植を否定する意見が大半だった、と幹部は補足説明をした。

それで決起集会の日の朝、学会よりの全国紙には、

「肝炎や梅毒の腎臓を移植か？病腎移植原則禁止へ」

とセンセーショナルな見出しがおどった。学会の思うつぼである。

宇和島へむかう水野の車のなかで、教授の三谷がなげいてみせた。

「一流の全国紙は一流の学生を採るが、一流紙は人材をつぶして凡才記者にしてしまうのも一流だからなあ」

うしろの席の原が視線を車内にもどして応じた。

「現場の若い記者は、病腎問題が医療界の権力闘争だということに気づきはじめていますよ。よく勉強もし、瀬戸内海グループの医師へもたびたび取材をしている。ところがかれらの書いた記事が、学会よりでないとデスクでつぶされるそうです」

「けしからんが、まあそうだろうな。記者魂をつぶされて中間管理職になった記者が、若い記者の書いた真実をつぶして、情熱に水をぶっかけ、じぶんたちはこれが処世だと権力にすりよる。まだまだこの国には自由なジャーナリズムは根づいていないなあ」

と三谷はなげいた。

「でも先生、論調がかわつてきたメディアもだいぶありますよ」

ハンドルをにぎりながら水野がいった。

「そういえば水野さん、愛媛新報は肝炎も梅毒も学会発表を鵜呑みにせず、丸山先生にちゃんと取材して報道しとったなあ。梅毒はドナーのカルテにずっと若いときの病歴として記述があったただけだし、肝炎も感染力の強いウイルスは陰性だったので、移植してもまったく問題はなかった、という丸山先生のコメントを載せていた。これだと読者に誤解や偏見を与えることはない」

三谷がめずらしくほめたので、水野はうれしくなった。

ここ最近、社内で津和田と会ってはいないが、こんど廊下でも出くわしたら、教授のほめ言葉をそのまま伝えてやろうと思った。すると原が背後から三谷に問いかけた。

「先生、われわれの会員のなかには死体、生体、病腎とギネス記録のレシピエントがいますよ、だれだと思えますか」

教授は背後へ上体をよじって、

「それは初耳だね。フルコースだけだからだは大丈夫なのか」

「ええ、もちろん、ぴんぴんしていますよ」

からだを前にもどすと、前方をみつめながら三谷はつぶやいた。

「決起集会に来てくださるとありがたいが」

「参加されていますよ」

「そう、じゃあ今日は舞台にあがって、病腎のレシピエントは自分だと名乗れば、会場から拍手喝采だ」

と三谷がいうと、

「舞台にあがることになっていますよ」

と原がいった。

教授はおどろき、また背後へ上体をねじった。

「え！ そうかい。だれだいそれは、向井原代表？」

「さあ、だれでしょう」

と原はもったいぶる。

水野は前方をみつめながら、

「いやだなあ、原さん。先生、それ、実はぼくです」

と一言、告白した。

「あー、そうですか」

と三谷は大きな声をあげ、水野の横顔をまじまじとみつめていた。

峠のトンネルをぬけると、冬日がにぶく映える宇和海がみえてきた。

「この問題はマスコミ報道で関心はあっても、わざわざ宇和島まで足を運ぶ人は少ないだろうな」

寒々とした景色を目にしながら三谷がしみじみといった。

行き交う車も少なく、南国とはいえ海も山も寒気にじっと息をひそめている。

「目標は三百、席が半分うまれば成功ですよ」

と水野が明るく応じると、うしろの席で有吉が口を開いた。

「わたし、きつと満席になると思うの。二階席もいっぱい」

「へえっ、どうして」

となりの席の原が訊いた。

「夢をみたの、大相撲みたいに満員御礼の垂れ幕を看板屋さんが大あわてで

つくっている。役員さんはみんな、予備のイスをならべるので大忙し」

と有吉は夢の話を夢みるようにいった。

車は宇和島の市街地にはいった。JR 駅前から文化会館へむかう舗道を歩く人たちのすがたが目につく。その文化会館に着いたのは開会の二時間前である。広場には放送局の車が横付けされ、取材用の機材をはこんでいた。水野は同乗の三人をおろし、恵州会病院へ丸山医師を迎えにいった。

昨夜、電話でうちあわせたとおりに、丸山は玄関ロビーの壁際の長いすにポツンとすわっていた。青色のダウンジャケットに身を包み、足もとは素足にサンダルである。

「先生、舞台でひとこと、お話ししてくださいよ」

服装をみて、水野が念をおした。

「うん、わかっとうる」

丸山は引率の教師を迎える児童のような表情をしてうなずいた。

すぐに文化会館へひきかえした。受付の準備をしていた役員がかけよってきて、北海道から移植者のご夫妻が来られたので、控室へお通ししました、と教えてくれた。水野は控室へ丸山医師を誘ったが、内藤先生と会場内で待ち合わせるから、と丸山はことわり、すたすたと会場へはいつていった。

控室へゆくと、テーブルにクリスタルガラス製の帆船のレプリカが置いてあった。レプリカをなかにして初老の夫妻と話していた向井原が水野に説明した。北海道で牧場を経営する夫は丸山医師が執刀した移植者である。がんの腎臓を移植して八年になるが、健康そのものである。病腎問題がおこると、北海道に住む丸山医師執刀の移植者たちに声をかけて募金をあつめ、オーダーメイドの帆船レプリカをつくった。そして夫妻はみんなを代表して直接手渡そうと、飛行機をのりつぎやってきたのだった。水野があらためてみつめると見事な出来栄である。台には、「万感の感謝 丸山誠先生 北海道患者会」と記されたプレートがはめこまれていた。

放送室にいた有吉をよびだして進行を手直した。丸山医師を激励する場面で、夫妻が舞台上に登場し、レプリカを手渡しすることにした。素敵なサプライズで、先生がどんなお顔をされるか楽しみです、と夫妻は喜んだ。

有吉に案内され、舞台のすぐ下の席に座ることになった夫妻がでてゆくと、入れかわりに受付の役員がはいつてきて叫んだ。

「水野さん、一階はじきにいっぱいになるぞ。二階席にもいれんといけんぜ！」参加者は有吉がみた夢のとおりになった。役員はみんな感動で目をうるまし、頬から耳たぶまであかくそめて走りまわっていた。開会の午後一時、文化会館から参加者があふれだした。受付で記名した参加者だけでも八百名をこえた。会場

内の通路という通路も人でうめつくされ、蒸すむような熱気のなかで決起集会が
はじまった。

高見澤敬三の講演は二時間近くにもおよんだ。

瀬戸内海グループがおこなった病腎移植四十二例の正確な病理学的分析、そ
してレシピエントの予後の調査について語り、病腎は不利な要因をさしひくと
生体腎とかわらない生着率であることを明らかにしたあと、高見澤は欧米各国
の実情について述べた。EU加盟各国は臓器移植について基本的には同一の国
内法を整備することになった。そこでドイツは移植法を改正し、「医学的処置の
範囲内で摘出・採取された臓器または組織」（いわゆる病腎）について、未成年者
をふくむ本人の同意があれば他人に移植することを認めることになった。スイ
スでも同様の法改正が行われ、病腎を移植につかうことができる。ほかのEU加
盟諸国もほぼ同じような「移植法」が制定されようとしている。さらにイギリス
ではこれまでの移植に関する法律を廃止し、あらたに「人体組織法」を制定した
が、この法律には病腎移植を禁止する規定はいっさいない。このほかにアメリカ、
カナダ、オーストラリア、ニュージーランドにも病腎移植を禁止する法律はない。
先進諸国のなかで、極端に臓器が不足している日本だけが病腎移植を否定しよ
うとしているのは誠に皮肉なことである。

高見澤の講演が佳境にはいり、移植医療についての日本の法学者の見解の紹
介にはいったときである。

舞台の袖に内藤医師が突如あらわれ、水野を手招きした。

舞台裏の通路へでると、内藤は良いニュースが届きましたよ、とほくほくした
顔で紙片をさしだした。病院の事務員から届いたばかりの連絡メモである。

「たった今、フロリダ大学の藤原先生からファクシミリ。五月にサンフランシ
スコで開催されるアメリカ移植会議で、丸山先生の演題が採用になりました。以
上、取り急ぎご連絡します。惠州会宇和島病院事務局長 長谷部」

「やりましたね、先生」

思わず、水野は内藤の手をにぎりしめていた。

内藤も手にちからをこめ、

「これは百歩前進です」

とにぎりかえしてきた。

「どうしましょう、会場で発表しましょうか」

「もちろんですよ。激励のときに、司会のほうでタイミングよく」

と内藤はアドバイスをした。

水野は舞台の袖にもどり、有吉とうちあわせた。

講演のあといったん休憩をいれた。役員が北海道からきた夫妻を舞台袖へ案

内し、帆船のレプリカを演台横の机の上においた。再開の冒頭、水野が署名活動の報告をした。署名数が六万一千名にたったことを発表すると会場から拍手がわきおこった。そして拍手が鳴りやんだそのとき、有吉が会場内をみまわしながら「今日は丸山先生もお見えになっています。先生、どうか舞台のほうへお上がり下さい！」と、ややうわずった声で登壇をうながした。

舞台脇の階段を丸山はよろけるようにあがった。拍手と歓声のなか、丸山はサングルの足音をひびかせながら舞台の中央へすすむと、演台を前にして立ち止まり、きよろきよろと会場をながめ、ひよっこり頭をさげた。とたんに会場がしんと静まった。

マイクの前で丸山は照れ笑いをし、えー、えーとくちごもり、息をととのえるといった。

「去年の暮れごろは、監獄で読む本をあつめとったけど、いかんでもええみたいなんてほっとします。捨てとった腎臓でも悪いところを切り取ったらつかえる。ぼくも患者さんも必死やったから、移植につかった。なんも特別なことをしたわけではありやせん」

それだけいうと丸山は立ち去ろうとした。

有吉があわてて、先生、少しお待ちください、と丸山の動きをとめた。

夫妻が舞台袖からあらわれた。丸山のところへ歩み寄ると、ふかぶかと頭をさげた。有吉が夫妻とレプリカのことを場内に紹介した。スポットライトの中、きらきらめく帆船レプリカが丸山医師へ手渡された。鳴りやまない拍手を静めるように、有吉が声をはりあげた。

「みなさん！　ここでビッグニュースをお知らせいたします。丸山先生が提出した演題、『腎移植レシピエントの最後の手段、生体ドナー患者からの病腎移植について』が五月にサンフランシスコで開催されるアメリカ移植会議で採用されました！」

おー、とあがったどよめきが会場をゆらした。

あちこちで悲鳴のような歓声がとびかい、場内は興奮の坩堝るっぼとなった。予想以上の反響があり、感激して泣き出す人たちもいる。日本でも病腎が認められれば、多くの患者が透析の苦しみからぬけだすことができるのである。まさに患者とその家族がすぐ近い将来へ希望をいだいた瞬間だった。

感動と興奮は決起集会の最後のシユプレヒコールで最高潮にたった。会場の全員が一団となり、あがらいようもなかった宿痾しゅくあの病へむかい、何度も何度も

「拳こぶしをふりあげていた。

翌日、この勢いをかり、厚生労働大臣へ六万名の署名簿を提出するため上京した水野たち五名の役員は厚労省を訪問した。所管の健康局長へ面会をもとめたが会えなかった。それで疾病対策課長に提出しようとしたが、あいにく不在ということだった。結局、臓器移植対策室のまだ若いふたりの担当官が水野たちに応対した。向井原が役員を代表して署名簿を提出したあと、水野は自分の子供よりも若い世代の担当官にむかって、

「多くの患者を見殺しにするような医療行政は絶対に許されません。私たちは、新たな移植の道として有望視されている修復腎移植の推進とともに、瀬戸内海グループの医師たちの医療活動の継続が保障されるまで、力強く闘います」と趣意書を読み上げた。